

クリス・マルケル —— 映画殺しの映像作家

河合政之 (ビデオアーティスト)

映画とビデオ（電子映像）というのは奇妙な関係で、いわばフロイト的に父と子にあたるのではないか。つまり映画の子であるビデオは、ひとつのメディアとして自立するために、エディプスとして父殺しを願望しているということである。クリス・マルケルの、映画にはじまりビデオ、インスタレーション、そしてCD-ROMやセカンドライフなどコンピュータを使ったものにいたる、幅広い映像作品の軌跡を眺めわたすならば、そのような映画とビデオの関係が浮かび上がってくる。

そもそもいわゆる「映画作家」としてのマルケルは、『ラ・ジュテ』（1962）にせよ『サン・ソレイユ』（1982）にせよ、もっともらしいがどうも不器用な感じが否めない。この「不器用さ」は、いったい何なのだろうか？ それを「シネマ・エッセイ」などという言葉であらわしてみても、いっこうにしっくりくるわけではない。

それを解くカギが与えられたのは、2007年NYのマリアン・グッドマン・ギャラリーで、ビデオ・インスタレーション『世紀が形づくられたとき（戦争と革命）』（1978）を見たときのことである。ロシア革命と第二次世界大戦の記録映像に激しいビデオ・エフェクトが加えられ、次々とザッピングされていく。その映像はあからさまにデータとして操作され、対象的な「事実」との関係を失い、また構成されるべき「真実」も志向しない。リアリズムや物語の強度といった映画的美学から遠く離れたそれは、いわば身もフタもなく冒瀆的な映像であった。

かつて『夜と霧』（1955）の助監督としてマルケルは、語り得ることのない「事実」や「真実」を、あえて映像で物語ることの意味を問うた。その彼が後半生にビデオ作品で探求したこととは何なのか。それは事実を写し、真実を物語るという映画の幻想に対する真っ向からの反論なのではないだろうか。

そのようなビデオと映画の関係が、もっとも先鋭的に対立して描かれているのは『レベル5』（1996）である。その中では、アウシュヴィッツと同じく近代史のトラウマの出来事である沖縄戦の悲劇に、主人公（と彼女が語りかける観客）は、怪しげなコンピュータのデータ操作を通してしか近づき得ない。そこであきらかにされるのは、映像というもの本質的にデータであり操作であるということである。

マルケルの映像に対するそうした姿勢は、ビデオ・インスタレーション作品において徹底されている。『ザッピング・ゾーン』（1990）では、自身の映像を含む多数の映像がザッピングを繰り返し、『サイレント・ムーヴィー』（1995）では、複数のモニター上でサイレント映画風の映像が、ランダムにスピードが変わったりエフェクトがかかったりして、同時に映し出される。また、オハイオ州立大学ウェクスナー芸術センターでの展覧会『ステアリング・バック』（2007）では、自身の過去の映画から抜き出された1フレームを、フォトショップやペインターといったソフトで加工した写真を展示した。このように自身の映像を、その内容にまるで無頓着に使い回して操作するのは、ビデオアートの始祖ナム・ジュン・パイクとの共通性を感じさせる。

こうしたマルケルの映像の身もフタもなさは、動物をテーマに「イッパツ芸」的なビデオ作品を集めた『ベスティエール』（1985-90）や、亡くなった愛猫ギョームをCGでセカンドライフ上によみがえらせたプロジェクト（2008）などでは、さらにはなほだしいものとなる。そこにあるのは、データであればこそ、リアリズムや物語への呪縛から逃れて自由になった映像の姿である。

いうまでもなく、私たちが生きているのは電子メディアの時代であり、そこでは映像は否応なくデータである。しかしその当たり前のことが、単に受容的ではなく批判的に、また反動的にではなく前向きに問われるのはこれからの課題である。そしてそのためにはデータの映像そのものの欲望を見出す、電子的な芸術的感性が必要とされるのだ。

映像が映画的に真実を語らなくなったことを湿っぽく嘆き懐かしむのは、シネフィルにまかせておけばよいだろう。対象や物語と不可分な映画の映像にとらわれたゴダールが、『映画史』（1988-98）において後ろ向きに、映画を永らえさせるためにビデオを「利用」するのとは逆に、マルケルはドライにもデータとしての映像そのものに直接的な可能性を見ていたのである。それがたとえ映画への冒瀆のように見えようとも、むしろ映画的美学への固執が倒錯であるのに過ぎない。どうしてそれを「エッセイ」などと、こじつけて呼ぶ必要があるのか？ 「不器用な映画監督」であったマルケルは、ビデオやコンピュータによって自由闊達に、その「身もフタもない」映像の感性を解放し得たのだ。その感性へと目を開くことは、映画を乗り越えることに他ならない。クリス・マルケルとともに、ビデオの父殺しは始まるのである。